

論文の概要および審査結果の要旨

氏名（本籍）	中御門 敬教（大阪府）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	乙第58号
学位授与の日付	令和2年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第6条
学位論文題目	普賢行と浄土思想
論文審査委員	主査 森山 清徹（佛教大学教授） 副査 本庄 良文（佛教大学教授） 副査 藤井 教公（国際仏教学大学院大学教授、同学長）

〔1〕論文の概要

論文の概要

本論は、大乘菩薩行の精華ともいえる「普賢行」に対する考察、そしてその菩薩行を大乘菩薩道の展開として受容した「浄土教」に対する考察を、主にインド、チベット、東アジアという三地域の典籍に基づいて行う、思想研究である。その考察の中心に据えるものは、『華嚴経』「入法界品」の要約でもあり、七支供養や浄土思想を融合させた内容を持つ『普賢行願讃』と『同釈』である。その意味で、本論はこの『普賢行願讃』の先行經典と、『普賢行願讃』が起点となって著述された論書・聖教類を、訳注研究を通して行う文献研究ともいえる。

本論の構成は以下のとおりである。

序論 各部の要約と重要語句の説明

第1部インド篇

第1章 大乘戒経から『文殊師利発願経』へ

第1節 『舍利弗悔過経』の解題と訳注

第2節 『三曼陀跋陀羅菩薩経』の解題と訳注

第3節 『舍利弗悔過経』と『三曼陀跋陀羅菩薩経』の位置付け －発心儀礼と三品儀礼（七支供養）－

第2章 『文殊師利仏土厳浄経』から『文殊師利発願経』へ

第1節 『文殊師利仏土厳浄経』の解題

第2節 『文殊師利仏土厳浄経』諸本の対照表

第3節 『文殊師利仏土厳浄経』の訳注

第3章 『華嚴經』にみる普賢行

第1節 普賢行と普賢行願

第2節 覚賢訳『六十華嚴』「普賢菩薩行品」と同『文殊師利発願経』における普賢行

第4章 『普賢行願讃』にみる普賢行

第1節 『普賢行願讃』の解題

第2節 『普賢行願讃略釈』の解題と訳注

第3節 略釈系統の比較研究 ―龍樹、世親、陳那、嚴賢をめぐる著者問題―

第4節 『普賢行願讃広釈』の解題と訳注

第5章 論書にみる普賢行

第1節 『集学論』第16章「賢行儀軌品」にみる普賢行

第6章 極楽往生後の利他行としての普賢行

第1節 『無量寿経』と普賢行

第2節 極楽往生後の利他行 ―浄土教の菩薩行としての展開―

第3節 『無量寿経』誓願文と釈迦菩薩行

第4節 陳那作『普賢行願讃釈』に説かれた極楽往生と釈迦菩薩行 ―還相廻向の前提―

第2部 チベット篇

第1章 チベットにおける普賢行と浄土教

第1節 智軍作『普賢行願釈備忘録』の解題と訳注

第3部 東アジア篇

第1章 日本における普賢行と浄土教

第1節 源信作『普賢講作法』の解題と訳注

第2節 西教寺所蔵、源信『普賢講作法』影印紹介 ―聖教類の原本、写本、書写問題―

資料篇 『普賢行願讃釈』略釈系統の諸本対照（作業用）

第1部 インド篇の要約

本論文の題目に出る「普賢行」について「狭義」と「広義」、そして「固有名詞」と「普通名詞」といった、二つの効果的な見方から考察が進められている。

先ず「狭義」と「広義」の点から概説すると、「狭義」は福德増上を目的とする七支供養を含意し、「広義」は輪廻を厭わない文殊菩薩の永続的な菩薩行を含意するという。前者の用例として、寂天著『集菩薩学論』「賢行儀軌品」、後者の用例として『華嚴経』「入法界品」が挙げられている。ちなみにこの立場の対極に「一生補処（もう一生涯過ごせば成仏する境地）」があり、実際に、普賢行を主題とする『華嚴経』「入法界品」に「一生補処」の概念は希薄であり、『無量寿経』「一生補処願」にも、「普賢行」は「一生補処」の対極として登場し、それは還相回向（極楽を起点とした循環的菩薩行）の根拠ともなっている点が指摘されている。『普賢行願讃』は、これら「狭義」と「広義」の二つの流れが合流した位置にあり、それら二つの流れを、典籍名に当てはめて示せば以下になるという。

一つ目の流れ：『舍利弗悔過経』→『三曼陀跋陀羅菩薩経』→『普賢行願讃』

二つ目の流れ：『文殊師利仏土厳浄経』→『普賢行願讃』

一つ目の流れの起点は、伝後漢安世高訳『仏説舍利弗悔過経』（『大正蔵』24,no.1492）である。ここには七支供養の原型ともいえる三品（懺悔、随喜、勧請）乃至、四品（三品、廻向）儀礼が説かれており、続く伝西晋聶道真訳『三曼陀跋陀羅菩薩経』（『大正蔵』14,no.483）は、『舍利弗悔過経』の構成をほぼ踏襲し、そこに『華嚴経』を中心に登場する普賢菩薩や、『無量寿経』が説く浄土思想（阿弥陀仏信仰）を受容した点が特徴とされている。普賢菩薩の登場を探る場合にも先ず注目すべきこの經典の段階で、三品、乃至、四品儀礼が「普賢菩薩行」と読み替えられている。「狭義」の祖型がここに見られ、かつ華嚴思想と浄土思想を融合させた『普賢行願讃』の先行經典として、極めて重要な位置にある点が指摘されている。

二つ目の流れの起点は、『無量寿経』と『阿閼仏国経』を承けて成立した、代表的なインド浄土經典の一つである『文殊師利仏土厳浄経』である。文殊菩薩を主題とする經典であり、各議論項目を分析的にそして体系的に整理した点（科文形式を採用している）が、先の二經典にはない特徴であると指摘される。この經典には、文殊菩薩の前世者である普覆王によって、輪廻を厭わない永続的な菩薩行が誓願されている。この文殊菩薩の誓願行を経名に掲げて成立した經典が、『普賢行願讃』である。この經典の最古の漢訳名が『文殊師利発願経』とあることや、文殊菩薩の永続的な菩薩行を「普く賢れた菩薩行」とし、その実践者として「普賢菩薩」を考えている『普賢行願讃釈』の記述からも、この二つ目の流れが読み取れる。こうした諸点を導き出すために、従来未翻訳であった漢訳『舍利弗悔過経』、漢訳『三曼陀跋陀羅菩薩経』、チベット訳『文殊師利仏土厳浄経』の現代語訳と解題が行われている。

『舍利弗悔過経』と『三曼陀跋陀羅菩薩経』の二経については、①大乘の発心儀礼、②福德増上の三品儀礼（七支供養）を目的とする「大乘戒経」であることが指摘されている。七支供養は後の密教では前行に配置され、福德増上を目的とした定型的なものである。その原形式の一つを伝えるものとしても、これら的大乗戒経の重要性が理解できるという。

次に、その「普賢行」を「固有名詞」と「普通名詞」の点から概説すると、固有名詞の普賢行の場合は「普賢菩薩の菩薩行」となり、普通名詞の場合は「普く賢れた菩薩行」となるという。両者の区別については、典籍の文脈から理解できる場合も、できかねる場合もあるし、注釈を用いても見解が断定できない場合もある。この点について、普賢菩薩の存在自体が個別的かつ総体的、すなわち個と全体の「円融相即」的な傾向を持つ点が指摘されている。こうした状況を背景にして、「普賢」の諸語義について整理を行った仏教者として、インド仏教をチベットに伝えた大翻訳師の智軍（Ye shes sde）の見解が紹介される。彼は自身の『普賢行願讃釈』において、「普賢の誓願の五義」を論じているという。

こうした普賢行の多義性、複合性を整理するために、本論文は、『普賢行願讃』の親本ともいえる『華嚴経』「入法界品」に出る「賢行」、「普賢行」、「普賢行願」、「普賢菩薩行」を中心とする用例を整理し、分析を行っている。そして覚賢訳『六十華嚴』「普賢菩薩行品」と、最古の『普賢行願讃』漢訳である同『文殊師利発願経』における「普賢行」の用例も考察され、その類似点と相違点についても整理、並びに分析されている。なお、『普賢行願讃』は『華嚴経入法界品』末尾に編入されているが、東晋仏陀跋陀羅訳『文殊師利発願経』

の時点では、同訳者によって『文殊師利発願経』（『普賢行願讃』最古漢訳）という名称で別訳されているように、その編入は唐般若訳『華嚴経入法界品』（四十華嚴）を俟たねばならないという。

その次に、『普賢行願讃釈』における普賢行を理解するために、『普賢行願讃略釈』自体の研究が重点的に行われている。ここでは、「略釈」としてチベット訳に現存する「龍樹、世親、陳那、嚴賢」の諸釈の中から、陳那釈を選択して重点的な訳注研究を行われ、平行して、密教家として有名な釈友による「広釈」の訳注研究も行われている。そしてこうした典籍読解を通して知り得た知見に基づき、類似した「略釈」の原著者が推定されている。これら諸釈の比較研究の一助として、付録に「普賢行願讃略釈の対照本」が載せられている。

その次に、論書における普賢行の用例が確認されている。用いられた典籍は、寂天著『集菩薩学論』第十六章「賢行儀軌品」と、瑜伽行派の典籍である。前者の考察においては、『集菩薩学論』自体における普賢行の扱いを確認するために、第十六章に引用される教証が調査、並びに整理されている。後者の考察においては、直接的に「普賢行」への言及はないが、狭義の普賢行、すなわち七支供養の部分的項目を挙げる『大乘莊嚴經』『阿毘達磨雜集論』の用例が、参考資料として掲載されている。

その次に、本論文の題目に出る「浄土思想」について、極楽往生後の利他行と関係する普賢行が以下の四点から考察されている。

- ① 『無量寿経』と普賢行
- ② 極楽往生後の利他行 ―浄土教の菩薩行としての展開―
- ③ 『無量寿経』誓願文と釈迦菩薩行
- ④ 伝陳那著『普賢行願讃釈』に説かれた極楽往生と釈迦菩薩行 ―還相廻向の前提―

漢訳『無量寿経』の中の、伝康僧鎧訳『無量寿経』の時点で、アビダルマ教学に基づく經典整備を受け、菩薩行としての浄土教が明確に確立された点が論じられている。同時に、その時点で『華嚴経』からの影響も受けて、往生後の利他行の根拠として、「普賢行」を採用した点も論じられている。極楽往生を最終的な目的とはせず、成仏を目指す菩薩行の一経由地とした点、それが特に東アジアでいわれる「還相廻向」の前提となった点が、特に強調されて指摘されている。

第2部チベット篇の要約

チベットの大翻訳師の智軍（Ye shes sde）による『普賢行願讃釈』の訳注研究が行われて、チベットにおける普賢行と浄土教の融合形態をについて考察されている。この典籍の冒頭は以下である。

「『聖なる〔普〕賢行願讃（'Phags pa bZang po spyod pa'i smon lam）』〔に対する〕軌範師陳那がお造りになったものと、釈友（Shā kya mi tra）と、仏称（Bu ddha kī rti）と、嚴賢がお造りになった註疏、〔合わせて〕四釈の内容（don）と、折々に和上たちから聞いたものと、經典（mdo sde）に出ているものとを結合させて、註釈が語釈しやすいよう（bshad pa brda phrad sla ba）備忘録とした。」

著者の智軍（Ye shes sde）は国家事業である『翻訳名義集』の編纂（814）に従事し、インド仏典をチベットに紹介した大翻訳師である。当時のチベットにおける第一級の仏教者

といえる。その彼には著作が三作しか残されておらず、その寡作のうちの一作が『普賢行願讃釈』略釈の備忘録として作られた『行願讃智軍釈』なのである。

第3部東アジア篇の要約

日本浄土教の確立に大きな影響を与えた、源信僧都による華嚴浄土義の著作、『普賢講作法』の訳注研究が行われている。この典籍は、「普賢行と浄土教」を考察する上での格好の典籍であるので、翻訳をもって紹介され、インドに端を発した「普賢行」と、それを受容した「浄土教」が、地域を横断して広まっていった点が考察されている。また本作は、仏教の一ジャンル「講式」の原型を探る上でも大変重要な位置をもつ。この典籍の著述年代、写本・刊本について、法華懺、『往生要集』との関係、引用典籍についても言及されている。訳注研究の結果、引用典籍の面からも『往生要集』との矛盾がない点が明らかになったという。また、書誌的な方面からの研究として、天台真盛宗総本山山西教寺（滋賀県大津市坂本）所蔵の源信『普賢講作法』の写本調査結果が報告され、そこから理解できた平安末期から院政期における、当時の学僧の聖教類書写問題について、聖衆来迎寺蔵（滋賀県大津市比叡辻）源信『靈山院釈迦堂毎日作法』（以下『靈山院作法』、京都国立博物館管理寄託）も参照されつつ、考察が行われている。

資料篇 『普賢行願讃釈』略釈系統の諸本対照（作業用）について

チベット訳として残る『普賢行願讃釈』略釈系統（四著作）の著者問題を考察する資料として、四著作の諸本対照本が提出されている。あくまで作業用であり、厳密な意味でのテキストではない。

〔2〕審査結果

「普賢行と浄土教」と題する中御門氏の博士請求論文は、永年の研究を蓄積した九百頁に及ぶ極めて大部なものである。その内容を吟味した総評と審査結果とを以下に表す。

文殊菩薩による大乘仏教の菩薩道の不断の実践を内容とする『普賢行願讃』の研究を目的とするものであるが、その由来と考えられる大乘仏教初期の経典研究及び多数の注釈書を初めて全訳し、それに立った研究である。インドにおける注釈書二点、チベットにおけるもの一点、日本においては源信のもの一点、何れも大部な注釈である。その全てを読了しその論考と訳注を施し、それぞれのテキスト資料も提示している。こういった総合的な研究は世界でも他に類例を見ず、仏教研究に多大な貢献をするものである。他方、論文と資料としての詳細な訳注とを一括して、個々の資料の研究を組み立てているため、全体の構成としては、論文部分と訳注部分とを分けて表すこと、研究全体に関する解説事項を最初に置くこと、また小結をそれぞれ表しているが、総合的結論を最後に表すことが、より明瞭に内容を把握させるものとなり得たと思われる。以下、論文内容に沿い、注視されたところを中心に指摘しておく。

1. 『普賢行願讃』

まずテキストと論題の意味するところであるが、普賢行とは何かということを一先大別して表している。狭義には七支供養（k.12 礼拝、供養、懺悔、随喜、勧請、懇願、廻向）を、広義には輪廻を厭わない文殊菩薩の永続的な菩薩行（普くすぐれた行）を意味し、この両

者の意味を合わせもつ仏典が『普賢行願讃』であると位置付ける。最古の漢訳が 420 年、仏陀跋陀羅（覺賢）により訳出された『文殊師利發願經』である。それが 44 偈からなるに対し、後に唐の不空訳(8 世紀半ば)『普賢菩薩行願讃』（大正,11.No.297）[白石サンスクリットテキスト]、及び般若訳(795~798 訳出)『四十華嚴』（入法界品、ガンンダヴェーハ）に編入されるものは 62 偈からなる。現存するサンスクリット本やチベット語訳も 62 偈からなる。したがって、『普賢行願讃』とは大別して古形の 44 偈からなるものと、いわば発展形態を示す 62 偈からなるものとの二種が知られることになる。さらに中御門氏は、その数ある注釈書の全訳を表している。各種ある注釈書を全訳し『普賢行願讃』の文献学的研究の方法としたものは、これまでになく全く新しい研究方法といい得る。注釈書の訳出を踏まえ元のテキストの研究を行うことは、正当な方法であると共に、その歴史的推移を探り思想史を明らかにし得るものとして評価されよう。また、中観派の学僧である 8 世紀のシャーンティデーヴァの『集菩薩学論』及びカマラシーラの『修習次第』に『普賢行願讃』への言及があることを指摘することは、『普賢行願讃』がインドにおいても広く受け入れられ重視されていたことが知られ、勝れた指摘である。

『普賢行願讃』44 偈までのものと、62 偈まで存在するものとの二種があり、この展開を考察することは重要といえよう。それは、以下の意味においてである。中御門氏は華嚴思想と浄土思想とを融合させた『普賢行願讃』と表現し、『華嚴經』を中心に登場する普賢菩薩や『無量寿經』の説く浄土思想（阿弥陀仏信仰）という把握を示している。このことが、論題「普賢行と浄土經」にも表れていると見られる。また氏は注記においてハリバドラ(800 年頃)による『現觀莊嚴論』の注釈（小註）最初部の記述に基づいて浄土教の三要素として誓願の完成、衆生の成熟、国土の浄化を挙げ、論題の浄土教ということ把握していると見られるが、その注釈（小註）自体には浄土教という表現は用いられず、またその三は梵本『二万五千頌般若經』にも見出される故、それらを浄土教の三要素と捉えることはチベット仏教タルマリンチェンの小註注釈における阿弥陀仏への言及に引っ張られた感があり再吟味を要しよう。

そこで『普賢行願讃』44 偈までの内容とそれ以降の 45~62 偈とを比較して見ると、以下のことに気が付く。氏の言う通り浄土思想を阿弥陀仏との強い繋がりから見ることができが、アミターバ（阿弥陀仏）、スカーヴァティー（極樂）に深く結びついた内容が現れるのは、後半 45~62 偈においてであり、前半の 44 偈までには、直接、阿弥陀仏に結びつくものではなく、大乘仏教の、例えば『二万五千頌般若經』などに表われる菩薩の衆生救済に関する誓願と異なるものではなく、むしろ軌を一にするものである。したがって、44 偈までの内容は必ずしも浄土思想に限ったものではなく、広く大乘仏教の菩薩行としての誓願と共通していると考えられ、この点を踏まえて考察する必要があると思われる。このことは『普賢行願讃』自体の推移、発展的展開を吟味する上で必要と見られる。

また発展形態を表す後半第 51 偈には「五逆罪のものも普賢行願讃を唱えれば罪が消滅される」ことが説かれるが、前半では七支供養の懺悔などの善根を無上菩提に廻向することという、いわゆる滅罪の仕方が表されていることとは、対照的ともいえる。上の五逆罪の滅罪の仕方を表す第 51 偈は氏が指摘する通り源信の注釈書にも表れる。それは、また『觀無量寿經』における下品下生者の救済や法然上人の滅罪増上縁を彷彿させるものさえあるといってもよい。この点は『普賢行願讃』自体の展開と変容とを探究する上からも、一層

注目されてよいはずである。

2. 『普賢行願讃』の諸注釈書

中御門氏の優れた研究成果といい得るものは、『普賢行願讃』に関する三本の注釈書を全訳していることである。インドにおけるものとして以下の二本を訳出している。何れもサンスクリット文のものは失われ、チベット訳を読解している。それは仏教論理学を樹立し、また『俱舍論』や『八千頌般若経』などの注釈を著わしたディグナーガ（陣那,480-540）によるもの、他は密教者でもあるシャーキャミトラ（釈友、八世紀頃）によるものである。チベットで著わされたものとしては、サンスクリット語仏典からチベット語への翻訳官として著名であり、インド仏教諸学派の哲学を集約した綱要書を著わしたイエシェーデ（智軍、九世紀）によるもの、さらには日本においては源信の『普賢講作法』を扱っている。極めて広範囲に及び『普賢行願讃』の総合的研究と呼び得るものである。それ故に、扱うべき問題も多岐に亘ることになる。著者の問題として、特にディグナーガに関しては、義浄による「陣那（ディグナーガ）の八論」にも含まれず、ディグナーガの他の著作における論述との共通性も不明といわざるを得ず、といって積極的にディグナーガの著作ではないと否定し得る明確な根拠もない現在、さらに吟味されなくてはならないであろうが、中御門氏の初めての全訳により、研究の状況は確実に次の段階へと大きく進展したといえる。この点、ディグナーガ作とされる注釈書に関しても氏の貢献は十分評価される。

『普賢行願讃』自体第11偈とその注釈書とは普賢行を「般涅槃に入ることなく輪廻に留まり衆生救済に励む菩薩行」の意味を表している。これは、いわゆる瑜伽行派のアサンガ（無着、4世紀）が『大乘莊嚴經論』『摂大乘論』などで無住处涅槃と呼ぶものであるが、それ故、氏は瑜伽行派の思想と関連するよう見ているが、無住处涅槃という名称はともかく「般涅槃に入ることなく輪廻に留まり衆生救済に励む菩薩行」という普くすぐれた菩薩の誓願は、『二万五千偈般若経』『維摩経』などにも説かれるところであり、『華嚴経』や瑜伽行派の思想に限って関連をいい得るものではなく、共通した大乘菩薩の誓願と実践でもある。また、普賢行の意義を吟味するのに「変化身による救済」を考慮する必要もある。

以上に関連して『無量寿経』の梵本に説かれる輪廻に留まり涅槃に入ることなく衆生救済に励む菩薩行としての普賢行と一生補処の階位にあることとを対極的に氏は見ているが、この点は菩薩思想の点から、さらなる究明を必要としよう。また、漢文の読みに関しても注意すべき点が、いくらか見られる。

イエシェーデによる k.56「最高の廻向が普賢行への廻向である」に関する注釈で、『十万頌般若経』（釈友も典拠として挙げる）と『一万八千頌般若経』との典拠により、誰が、何を、どこに廻向するかという、廻向の仕方が説かれている。すなわち「空」の思想に基づく廻向の仕方が説かれ、それが最高の廻向である旨が表されている。これはイエシェーデが k.56 を『般若経』を典拠に注釈していることを表している。しかし、その同定がされておらず、チベット訳『般若経』の大蔵経中の番号を示すだけでは不十分であり、典拠を特定し表す必要があると思われる。この典拠名と思想内容からも、それは、大品系の『般

若經』からのものであり、『サンスクリット二万五千頌般若』及び『大品』摂五品第 68 品に、ほぼ一致するものを見出すことができる。『二万五千頌般若』(木村 p.87,11-12,2428) から表せば「(菩薩大士は) 最高にして等しいもののない菩提に廻向する。例えば、この誰が廻向するのか、あるいは何を廻向するのか、あるいはどこに廻向するのか、という三種の考えが起こらない、そういうふうに廻向する。」ディグナーガが特に典拠を示さないことから、『十万頌般若經』を典拠として挙げることにに関して、イエシェーデは釈友の注釈を参考にしたかも知れないが、イエシェーデは『般若經』の具体的な記述に基づき k.56 の「最高の廻向」に関し優れた注釈を施していると見られる。この点からも『普賢行願讃』の偈頌のみから知られる内容は限定的となるが、中御門氏の種々の注釈書の研究から、その意味するところの真意に迫ることが可能となる。

k.38 の注釈において、ディグナーガとイエシェーデとは、同じ典拠の同一文によって注釈を施している。そのうち『如来藏經』があるが、そこに説かれる十不善業は、他に多く見られるものとは異なり、「殺生」を独覺に相当させる父に対することとし、また他の重罪を阿羅漢に相当する母に対することとし、部分的に五逆罪と重ねて意味を表している。この点は注目されてよく、この内容をもつ『如来藏經』の成立を考察することも、ディグナーガ作とされる注釈の真作であるか否かを探る手立てとなる可能性があるだろう。さらに『ウパーリ所問經』と『入法界品』との同一箇所からの引用があるのであるから、これは偶然の一致ではなく、この偈の注釈においてイエシェーデはディグナーガ作とされる注釈書によっていることが知られる。この点を明瞭に指摘する必要があるだろう。また、イエシェーデは『般若經』からの引用として「色を始め五蘊の空であること」を典拠にしているが、この出典が示されていないが、これは『大品般若經』問住品第 27 に見出し得る。廻向に関する引用と考え合わせて、イエシェーデの『般若經』の学僧としての面が知られよう。

なお、氏は浄土經典でもあり『普賢行願讃』へと連なると指摘する『文殊師利仏土嚴浄經』のチベット語訳のテキストを初めて訳出している。そのうち、仏国土の莊嚴の量に関し毛髮の先端を百に分割し、それによりすくい取られた海水と残りの海水の量とを比較する文面は、浄土經典『無量寿經』のものと一致することを指摘する必要があるだろう。

源信(942-1017)には『普賢講作法』があり『往生要集』における教証と共通する点の指摘を始め詳細な研究から日本においても『普賢行願讃』が受容された実態が知られ、インド、チベット、日本に至る広範囲な流布による影響を中御門氏の研究により具に見て取ることができる。

以上、中御門氏の論文は、インド、チベット、日本に及ぶ各種の注釈書の全訳を踏まえた『普賢行願讃』の総合的研究であり、思想史の全貌が初めて明らかにされたことは、この分野に留まらず、大乘仏教の菩薩思想の解明に長足の進歩をもたらしたことになる。それに比し、上で指摘したことは中御門氏の研究を拠り所とした枝葉に過ぎないものである。よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに相応しいと判断する。